

さくはなし

作・中野浩作

登場人物	お嬢様	トマ	ツジ	おせん	BC	ワケ	タアケ	コケムシ
・	・	・	・	・	・	・	・	・
・	・	・	・	・	・	・	・	・
お屋敷のお嬢様	お屋敷の執事	お屋敷のメイド	お屋敷の女中	お屋敷の番犬	虫けら	虫けら	虫けら	虫けら、あるいは街

OP　　～お人形と虫けら～

舞台中央に椅子が一脚。

椅子の上方に一輪の花が浮いている。
他の舞台装置はない。

舞台上に佇む、登場人物たち。

全員、微動だにしない。まるで人形のようなものである。

コケムシ、唐突に動き出す。

同時に、虫けらたちも動き始める。

虫けらたち、周囲の登場人物たちを小馬鹿にしたような表情を見せる。

ワケ、空の植木鉢を静止しているおせんに手渡す。

タアケ、椅子の上に花束を置き、去る。

お嬢様、人形の形から解放され虫けらたちの姿を追うように、彼らが去った方向を見る。
使用人（トマ、ツジ、おせん、BC）、人形の形から解放され、去る。

1 くおそらく朝の情景く

朝。

きらきらと光る朝日、小鳥たちの声。

お嬢様、入り口に向かつてにこやかにしている。
何者かが出かけるのを見送っているようである。

お嬢様 「いってらっしゃいませ！！」

お嬢様、元気に手を振り、何者かの姿を見送る。

しばらくして、手を振るのを止める。しかし、視線は屋敷の外に。
トマ、登場。

部屋の様子を見て回る。

ふと、椅子の上の花束に眼をとめ、手に取る。

一瞬、その花束をしっかりと見つめるトマ。
しばしして、去る。

お嬢様、だらりと椅子に腰かける。

お嬢様 「(退屈だとも言うように大きくあくび) あゝあ・・・」

トマ、再入場、お嬢様に水を与え始める。

お嬢様 「ねえ、トマ」

トマ 「(優しげに) はい」

お嬢様 「お父様はいつ戻ってくるのかしら？」

トマ 「お忙しい方ですから」

お嬢様 「お土産は何かしら？」

トマ 「なんでしようね？」

お嬢様 「私の好きなものだったらいいなあ」

トマ 「きっとお嬢様のお好きなものでしょう」

お嬢様 「本当！？」

トマ 「ええ。きつと」

お嬢様 「だったらいいなあ」

トマ 「なんだったら満足なさいますか？」

お嬢様 「そうねえ・・・」

お嬢様、椅子から立ち上がり、何かを考える。
無人の椅子に、じょうろで水を与えるトマ。

お嬢様 「お人形かな・・・」

トマ 「可愛いお人形？」

お嬢様 「いいえ、違うわ」

トマ 「お人形なのに？」

お嬢様 「ええ、可愛くないお人形なの」

トマ 「(少し笑顔で) 可愛くないならどんなお人形でしょう？」

お嬢様 「愛らしいのよ」
トマ 「どう違うんです？」
お嬢様 「誰も可愛いって言わないから愛らしいお人形。本当は可愛いのよ」
トマ 「誰も言ってくれないなんて、かわいそうですね」
お嬢様 「可愛そうじゃないわ。愛そうって言うのよ」
トマ 「誰も言わないから？」
お嬢様 「そう、だから、私が言ってあげるの。あなたは愛らしいお人形なのよって」
トマ 「そうしたらお人形は可愛いお人形になれますね」
お嬢様 「(嬉しそうに) でしょ？」

お嬢様、嬉しそうに笑う。
トマも笑顔で答える。

トマ 「旦那様はきつとおっしゃってくださいますよ」
お嬢様 「え？」
トマ 「お嬢様に、可愛いとおっしゃってくださいます」
お嬢様 「本当に？」
トマ 「ええ、もちろんですとも」
お嬢様 「でも、お父様は照れ屋さんだから、なかなか私に可愛いなんて言ってくれないわ」
トマ 「でも、心の奥ではちゃんと思ってるはずですよ」
お嬢様 「そうしたら私は可愛いお嬢さんになれる？」
トマ 「ええ、もちろん。でも、今のままでも十分愛らしいですよ？」
お嬢様 「愛らしい私は好き？」
トマ 「ええ、もちろん。大好きですよ。お嬢様」
お嬢様 「(照れて) えへ・・・」
トマ 「お嬢さまは本当に愛らしい。お人形なんかよりもよっぽど」
お嬢様 「でも、お人形は本当に欲しいのよ」
トマ 「お人形じゃなかったら、どうします」
お嬢様 「お人形じゃなかったら・・・？」

再び考えるお嬢様。
と、ワケ登場。

トマ、お嬢様に水を与える。
ふらふらと屋敷の中を歩く、ワケ。
ワケを見やるお嬢様。お嬢様とワケ、目があう。

お嬢様 「(ふと)・・・花」
トマ 「はい？」
お嬢様 「お花が欲しいわ」
トマ 「(淡々としかし、妙にはっきりと) お花」
お嬢様 「(ワケを指して) だって、蝶々が入ってきたのよ」
トマ 「蝶々」

トマ、ワケを見やる。

お嬢様 「蝶々が入ってきたら、止まる花がいるわ」
トマ 「蝶々はすぐに出て行ってしまうよ」
お嬢様 「こうしたら？」

お嬢様、ワケの手を握る。
嬉しそうに見合う二人。

お嬢様 「ね？ こうしたら、離れないもの。出て行きもしないわ」
トマ 「止まる場所が必要ですね」
お嬢様 「一晩泊まる場所が必要でしょう？」
トマ 「淡々としかし、妙にはつきりと」 お花
お嬢様 「そう。お花」
トマ 「お土産に」
お嬢様 「何かを期待するようにワケを見つめて」 そう、お父様がお土産に」
トマ 「旦那様がお土産に」
お嬢様 「お父様がお土産に」
トマ 「旦那様がお土産に、何を？」
お嬢様 「お花」

トマ、足を一つ踏み鳴らす。

BC 「わおおおおんん……！」

と、突然 BC 登場。ワケに掴み掛り、そのまま連れ去る。
啞然とするお嬢様。

その様子を見ているトマとお嬢様。トマ、ふと水をお嬢様に与え始める。
ツジ登場。BCの様子を屋敷の中から眺め、ぐるりと屋敷を回った後トマに詰め寄り、そのまま二人、退場。

BC、戻ってきて、舞台の端にちょこんと座る。
ややあって、じょうろの割れる音がする。
ツジ、再度登場。

ツジ 「(にこやかに、お嬢様に向かって) お嬢様、おはようございます」
お嬢様 「ツジ！ 虫さんが入ってきたのよ！」
ツジ 「あら」

ツジ、ぐるりと振り返る。
そこに遅れて、トマ登場。ちょうどツジと向かい合う格好になる。

ツジ 「虫けらが入ったのですか？」
トマ 「(必死の形相で) なあ、ツジ」
ツジ 「どうして、トマはそんなに頼馬なのです？」
トマ 「(やや優しく) ツジ」
ツジ 「トマがそれも頼馬だと、執事様の意味がなくなるでしょう？」

トマ 「(やや強く) ツジ」

ツジ 「まったく、呆れかえったものです。それでも執事様なんですか？ バカバカしいにもほどがあります。あ、馬であるのは確かですね。頓馬なトマ」

トマ 「(強く) ツジ！」

ツジ 「頓馬なトマなら、とかとかしいとかという言葉になるのでしょうか？ とかとかしい。なんて間の抜けた言葉。まるでトマのためにあるようです。ああ、トマはそう呼ばれるためにここにいるのですね。とかとかしいバカで頓馬なトマ」

トマ 「(かなり強く) ツジ！……！！！」

ツジ、トマの口を無造作に押さえる。

ギリギリとにらみ合う二人。

ツジ、トマを放り投げる。

ツジ 「うるさい」

トマ 「痛い！！！」

ツジ 「痛いようにつまみましたから」

トマ 「何故、トマのじょうろを壊した！？」

ツジ 「はい？」

トマ 「水を与えることの何がいけない！？」

ツジ 「(馬鹿にしたように) 何を言っているんです？」

トマ 「トマが作った習慣だ！」

ツジ 「(馬鹿にした様子で) そりゃあ、そうですよ」

トマ 「その習慣に従って何が悪い！？」

ツジ 「何も従ってはいけないなんて言ってはいません」

トマ 「ほう」

ツジ 「(ものすごく明るく) ツジはトマが嫌いなんです」

トマ 「(妙に明るく、強く) ほお！！！！ そうか！！！！ ツジはトマのことが嫌いなのか！？」

ツジ 「(同様に明るく) ええ、それはもう、一挙手一投足のすべてが」

トマ 「(さらに明るく) そうは言っても、ツジはトマよりも立場が下なんだぞ？」

ツジ 「(明るく) それはトマの視点から見た場合でしょう？」

トマ 「事実だ！」

ツジ 「かわいそうなトマ」

トマ 「かわいそくない！！！」

ツジ 「哀れなトマ」

トマ 「哀れなくない！！！」

ツジ 「そのようにして自らの立場に縋り付いて、この屋敷の序列を決めようなんて、なんて、とかとかしい」

トマ 「(かっとなって) ツジ！……！！！」

ツジ、おもむろにトマの頬を掴む。

ツジ 「ツジはトマのことが嫌いです」

トマ 「(ふがふが)」

ツジ 「しかし、お嬢様のお世話をしなければならぬ以上、基本的には協力的であり

たいと考えております」

トマ 「(ふがふが)」

ツジ 「しかし、あくまで基本的には協力的であるというだけであって、全面的にツジがトマの言いなりになるわけではないことを」

トマ 「(ばたばた)」

ツジ 「(非常に鋭く) いつになったらご理解いただけるのでしょうか？」

お嬢様 「ねえ」

ツジ 「(トマの口を押えたまま) なんでしょうお嬢様」

お嬢様 「蝶々はどうなってしまったの？」

ツジ 「さて、犬が啜えていました」

お嬢様 「食べられちゃったの!？」

ツジ 「さて。どうでしょう」

ツジ、トマを離す。

ツジ 「(ひどく鋭く責めるように) トマ、あなたがしっかりしていないから、お嬢様が

ちようちようなんぞに気を取られています」

トマ 「(頬の具合を確かめながら嫌味っぽく) また新しいモノを用意しなければならな

いなあ」

ツジ 「(そっけなく) ええ、どうぞ、ご自由に。しかし、水をやるのは、ツジの前では絶対に行わないように」

トマ 「じゃあ、いつやればいい? 必要な習慣なんだぞ!？」

ツジ 「ツジの見ていないところでこそそそとどうぞ」

トマ 「習慣だ!」

ツジ 「トマのでしょ? ツジのではない」

トマ 「トマの習慣は屋敷の習慣だ!」

ツジ 「そう思っているのはトマだけです」

トマ 「(怒り心頭) むああああああ・・・」

と、突然、おせん登場。BC、おせんに懐く。

手には植木鉢を持って、去る。BCも共に。トマ&ツジ、おせんに視線を向けている。

お嬢様、おせんの様子をうかがう。

お嬢様 「ねえ」

トマ 「じょうろは大切なんだ!?!?!?!?!?!」

お嬢様 「おせんは何を持っていたの？」

ツジ 「トマにとっては大切かもしれませんが、ツジにとっては、(懐から絵筆を取り出し) これさえあれば平気なのです」

お嬢様 「ねえ」

トマ 「そいつで何をするんだ？」

お嬢様 「ねえってば!?!?!」

ツジ 「絵筆で出来ることなんてそう多くはないと思いますよ?」

トマ 「絵を描くんだな」

ツジ 「絵を描くんです」

トマ 「(嫌味たらしく) どんな絵を描くんだい?」

ツジ、お嬢様の傍らに。

ツジ 「そりゃあ、お嬢様の絵に決まっているじゃないですか」
お嬢様 「(飛び上がるほど嬉しそうに) 私を描いてくれるの？」
ツジ 「ええ、それはもう、きれいな絵を描いて差し上げますよ」
お嬢様 「(とても嬉しそうに) うんと、素敵に描いてね、ツジ」
ツジ 「ええ、それはもちろん」

居心地の悪いトマ。

お嬢様 「きつと、きれいに描いてね」
ツジ 「ええ、それはもちろん」
お嬢様 「お花みたいに描いてね！」
ツジ 「(表情を変えることなく)・・・え？」
お嬢様 「だから、きれいなお花みたいに描いてちょうだい！」
ツジ 「(妙にはつきりと)・・・お花」
お嬢様 「そう、お花」
ツジ 「(淡々と) お花は、咲いていますよ」
お嬢様 「違うわ、私のことをお花みたいに描いてほしいの」
ツジ 「いいえ、お花は咲いております」
お嬢様 「(周囲を見回し) どこに咲いてるの？」
ツジ 「しっかりと、目の前に咲いております」
お嬢様 「どい？」
ツジ 「いい」

お嬢様、周囲を見渡す。

お嬢様 「どこ？ ねえ、ツジ、お花はどこに咲いているの？」
ツジ 「・・・(にこやかに) ええ、お嬢様の絵を描いて差し上げますよ」
お嬢様 「ねえツジ、お花はどこに咲いているの？ お花が咲いているのなら、今欲しいわ！ さっきの蝶々が泊まれる場所が必要ですよ。でも、残念なのは、お花の形を私は知らないの。でも、お花のことを私は知っているの。でも、お花がどんな色をしているのか知らないの。知らないものに蝶々さんは止まってくれるのかしら？」

おせん、BCを伴い登場。

おせん 「(屋敷の外に向かって) 虫けらがいます」

トマ、厳しい視線を外に向ける。

お嬢様 「(興味津々といった様子で) どい？」
おせん 「(BCを撫でながら) さあ、BCは働き者ですから」
お嬢様 「食べちゃったの？」

おせん 「(優しく) 虫けらなど、食べませんよ」
トマ 「虫けらは食べ物ではありませんよ」
ツジ 「(おせんに) なぜ、食べないのかしら？」

ツジ、おせんを見やる。

ツジ 「番犬なのだから、それぐらいのことはしないと」
おせん 「あら、そんなもの食べたらお腹を壊してしまいます」
ツジ 「(やや挑戦的に) 躰が悪いのでは？」
おせん 「(淑やかに) 何をおっしゃいますか」
ツジ 「ちようちようが入ってきました」
おせん 「(おほほ、と笑い) ええ、そうね」
ツジ 「(淡々と) 犬は飼い主に似ると言います」
おせん 「それはおせんのことをおっしゃっているのかしら？」
ツジ 「犬は飼い主に似ると言います」
おせん 「それとも旦那様のことをおっしゃっているのかしら？」
ツジ 「犬は飼い主に似ると言います」
おせん 「だとしたら、旦那さまを大呼ばわりなさるのですね？」
ツジ 「虫けらはどうしたんです？」
おせん 「あちらに二匹」
ツジ 「虫けらはどうしたんです？」
おせん 「あちらに二匹。あ、でも、ちようちようも入れたら三匹ですわね」
ツジ 「躰が悪いのでは？」
おせん 「あら、では叩けばよろしいのでは？」
ツジ 「ええ、そうしましょう」

ツジ、腕を振り上げ、おせんを叩く。
緊張感。

おせん 「(ぼそりと)・・・下劣な習慣」
ツジ 「上品かぶれ」
おせん 「(ツジを睨み付けて) 暴力に訴える」
ツジ 「笑えばいいと思ってる」
トマ 「(二人に) 止めなさい」
ツジ 「トマ、これも習慣です」
トマ 「そんな習慣知らない。勝手に増やすな」
おせん 「(まったく無視して) お嬢様、お花が咲きますよ」

トマ、ツジ、ばつとおせんを見る。

お嬢様 「え！」
おせん 「お花が咲きますよ」
お嬢様 「本当に？」
おせん 「ええ。綺麗なお花」
お嬢様 「いつ咲くの！？」

おせん 「もうすぐ——」
トマ 「花は咲いています」
ツジ 「ええ、咲いています」
お嬢様 「どこ？」

お嬢様、屋敷の外を見る。
トマ&ツジ、お嬢様を見ながら。

トマ 「(静かに) お花」
ツジ 「私たちのお花は咲いています」
トマ 「とても愛らしく咲いています」
ツジ 「愛らしいお花」
トマ 「お花は咲いています」
お嬢様 「ねえ、外に出てもいいかしら！！！」
トマ&ツジ 「(きつく) なりません！！！」

驚くお嬢様。優しくお嬢様に寄り添うトマ&ツジ。

トマ 「(優しく) お外には出て行けませんよ」
ツジ 「(優しく) 悪い虫がたくさんいますから」
トマ 「こんなにも愛らしいお嬢様がお屋敷から出たら」
ツジ 「どんな悪い虫が集まってくるかわかりません」
お嬢様 「でも、BCがいるわ」
トマ 「そうですね、BCは働き者です」
ツジ 「でも、お屋敷で過ごしましょう」
トマ 「旦那様がお戻りになるまで」
ツジ 「お屋敷のお外には出ないこと」
トマ 「それがお嬢様の習慣でございます」
ツジ 「ねえ、お嬢様」
お嬢様 「お花が見たい」
トマ 「(にっこりとほほ笑んで) いつかご覧になることができます」
ツジ 「ええ。いつかご覧に出来ます」
お嬢様 「(やや弱く) 本当に？」
ツジ 「ええ。旦那様がお土産をお持ちになるでしょう」
トマ 「お外に出られては、入れ違ってしまいかもしれません」
ツジ 「ですから、ずっと、待ちましょう」
トマ&ツジ 「お屋敷の中で、待ちましょう」

お嬢様のみ動きを止める。
おせん、庭を見ながら。

おせん 「(にこやかに、静かに) 旦那様はどちらにお出かけになったのでしょうか？」
トマ 「旦那様はお戻りにはならない」
おせん 「では、私たちは嘘つきなですね」
ツジ 「旦那様はいない」

おせん 「いいえ。旦那様はいます」

トマ 「ここにはお嬢様と我々しかいない」

ツジ 「それでいいのです」

おせん 「それはなんて退屈なんでしょう。・・・お花が咲くのを待つことにしますわ」
ツジ 「お花は、咲いていますよ」

トマ、ツジ、人形のように動きを止める。

一人佇むおせん。

そこにひらひらと、ワケ登場。それに続いて、タアケ。ひらひらとさまよう三人。
おせん、二人の中にあつて、心地よさそうである。

そして、虫けら、おせん、人形のように動きを止める。

ややあつて、コケムシ登場。椅子の上に、花の冠と何かの生えた植木鉢を置く。

コケムシ 「もうすぐ」

柱時計の音。

虫けらたち、人形の形から解放され、去る。

従者たちも同様に去る。おせん、植木鉢を持っていく。

2 うそらしく朝の情景2

朝。

きらきらと光る朝日、小鳥たちの声。

お嬢様、椅子の上の冠を発見し、かぶる。

お嬢様、入り口に向かって、

お嬢様 「いってらっしゃいませ！！」

お嬢様、元気に手を振り、何者かの姿を見送る。

しばらくして、手を振るのを止める。しかし、視線は屋敷の外に。

ツジ、スケッチブックを持ち、登場。

部屋の様子を見て回り、絵を描く準備。

と、お嬢様の頭の冠を見て、無造作に奪い取り、ぐしゃぐしゃにして去る。

お嬢様、無反応。だらりと椅子に腰かける。

お嬢様 「(退屈だとしても言うように大きくあくび) あゝあ・・・」

ツジ、画材を持って再登場。

ツジ、お嬢様の絵を描き始める。

お嬢様 「ねえ、ツジ」

ツジ 「(淡々と) はい」

お嬢様 「お父様はいつ戻ってくるのかしら？」

ツジ 「さて、お忙しい方ですから」

お嬢様 「お土産は何かしら？」

ツジ 「なんでしょうね？」

お嬢様 「私の好きなものだったらいいなあ」

ツジ 「きつとお嬢様のお好きなものでしょう」

お嬢様 「本当！？」

ツジ 「ええ。きつと」

お嬢様 「だったらいいなあ」

ツジ 「なんだったら満足なさいますか？」

お嬢様 「そうねえ・・・」

お嬢様、椅子から立ち上がり、何かを考える。

お嬢様の絵を描くツジ。

お嬢様 「お人形かな・・・」

ツジ 「可愛いお人形？」

お嬢様 「いいえ、違うわ」

ツジ 「お人形なのには？」

お嬢様 「ええ、可愛くないお人形なの」

ツジ 「(少し笑顔で) 可愛くないならどんなお人形でしょう？」

お嬢様 「愛らしいのよ」

ツジ 「どう違うんです？」
お嬢様 「誰も可愛いって言わないから愛らしいお人形。本当は可愛いだよ」
ツジ 「誰も言ってくれないなんて、かわいそうですね」
お嬢様 「可愛そうじゃないわ。愛そうって言うのよ」
ツジ 「誰も言わないから？」
お嬢様 「そう、だから、私が言ってあげるの。あなたは愛らしいお人形なのよって」
ツジ 「そうしたらお人形は可愛いお人形になれますね」
お嬢様 「（嬉しそうに）でしょ？」

お嬢様、うれしそうに笑う。
ツジも笑顔で答える。

ツジ 「旦那様はきつとおっしゃってくださいますよ」
お嬢様 「え？」
ツジ 「お嬢様に、可愛いとおっしゃってくださいます」
お嬢様 「本当に？」
ツジ 「ええ、もちろんですとも」
お嬢様 「でも、お父様は照れ屋さんだから、なかなか私に可愛いなんて言ってくれないわ」
ツジ 「でも、心の奥ではちゃんと思ってるはずですよ」
お嬢様 「そうしたら私は可愛いお嬢さんになれる？」
ツジ 「ええ、もちろん。でも、今のままでも十分愛らしいですよ？」
お嬢様 「愛らしい私は好き？」
ツジ 「ええ、もちろん。大好きですよ。お嬢様」
お嬢様 「（照れて）えへ・・・」
ツジ 「お嬢さまは本当に愛らしい。お人形なんかよりもよっぽど」
お嬢様 「でも、お人形は本当に欲しいのよ」
ツジ 「お人形じゃなかったら、どうします」
お嬢様 「お人形じゃなかったら・・・？」

再び考えるお嬢様。

と、ワケ、タアケ入場。

ツジ、お嬢様の絵を描いている。
ふらふらと屋敷の中を歩く、ワケ、タアケ。
虫けらたちを見やるお嬢様。お嬢様と虫けらたち、目があう。

お嬢様 「（ふと）・・・花」
ツジ 「はい？」
お嬢様 「お花が欲しいわ」
ツジ 「（淡々としかし、妙にはっきりと）お花」
お嬢様 「（二人を指して）だって、虫さんが入ってきたのよ」
ツジ 「虫」

ツジ、虫けらを見やる。

お嬢様 「虫さんたちが入ってきたら、止まる花がいるわ」

ツジ 「虫さんはすぐに出て行ってしまいますよ」

お嬢様 「こうしたら？」

お嬢様、ワケ&タアケ達の手を握る。
嬉しそうに見合う三人。踊ってもよい

お嬢様 「ね？ こうしたら、離れないもの。出て行きもしないわ」

ツジ 「止まる場所が必要ですね」

お嬢様 「一晩泊まる場所が必要でしょう？」

ツジ 「(淡々としかし、妙にはっきりと) お花」

お嬢様 「そう。お花」

ツジ 「お土産に」

お嬢様 「(何かを期待するように虫けらたちを見つめて) そう、お父様がお土産に」

ツジ 「旦那様がお土産に」

お嬢様 「お父様がお土産に」

ツジ 「旦那様がお土産に、何を？」

お嬢様 「お花」

ツジ、足を一つ踏み鳴らす。

BC 「わおおおおんんー！！」

と、突然 BC 登場。虫けらたちに掴み掛り、そのまま連れ去る。
啞然とするお嬢様。

トマ、登場、そのまま BC の方向へと去る。

その様子を見ているツジとお嬢様。ツジ、ふとお嬢様の絵を描き始める。

トマ登場。BCの様子を屋敷の中から眺め、ぐるりと屋敷を回った後ツジに詰め寄り、そのまま二人、退場。

BC、戻ってきて、舞台の端にちょこんと座る。

ややあって、スケッチブックの破れる音がする。

トマ、再度登場。

トマ 「(にこやかに、お嬢様に向かって) お嬢様、おはようございます」

お嬢様 「トマ！ 虫さんが入ってきたのよ！」

トマ 「おや」

トマ、くるりと振り返る。

そこに遅れて、ツジ登場。ちょうどトマと向かい合う格好になる。

トマ 「虫けらが入ったのか？」

ツジ 「(何かを我慢するように) ねえ、トマ」

トマ 「どうして、ツジはそんなに間抜けなのだ？」

ツジ 「(やや優しく) トマ」

トマ 「いいや、違うな。ツ抜けた。ツツジになれない、つまりは中途半端なツジ」

ツジ 「(やや強く) トマ」

トマ 「まったく、呆れかえったものだ。それでもメイドか？ いや？メイドではないな。なんだ？ ああ、半端者か。ツ抜けのツツジ。あるいは、ヒツジのツを抜いて、ヒジと呼んでやろうか？」

ツジ 「(強く) トマ！」

トマ 「いずれにせよ、どちらも中途半端だ。途中で終わって何も残らない。自分の職務もまっとうにこなせない。メーメー鳴いて、その辺は羊とそっくりじゃないか。メーメー、メーメー。(大げさに何かに気が付いて) いっそ、メーデーメーデーにしたらどうだ？ (意地悪気に) 助けを請われても、何もしてやらないけどな」

ツジ 「(かなり強く) トマ！……！！」

トマ、ツジの口を無造作に押さえる。

ギリギリとにらみ合う二人。

トマ、ツジを放り投げる。

ふっとぶツジ。

トマ 「やかましい」

ツジ 「(頬を押えて) 痛い……！！」

トマ 「痛いようにつまんだ」

ツジ 「トマ」

トマ 「うん？」

ツジ 「お絵かきの何がいけないのです！？」

トマ 「(馬鹿にしたように) 何を言っているんだ？」

ツジ 「ツジの作った習慣です！」

トマ 「(馬鹿にした様子で) そりゃあ、そうだ」

ツジ 「その習慣に従って何が悪いんです！？」

トマ 「何も従ってはいけないなんて言っていない」

ツジ 「へえ」

トマ 「(ものすごく明るく) トマはツジが嫌いだ」

ツジ 「(妙に明るく、強く) はあ……！！ そう……！！ トマはツジのことが嫌いなのですか……？」

トマ 「(同様に明るく) ああ、それはもう、一挙手一投足のすべてが」

ツジ 「(さらに明るく) そうは言っても、ツジはトマよりも先輩なんですよ……！！」

トマ 「(明るく) それはツジの視点から見た場合だろう？」

ツジ 「事実です！」

トマ 「かわいいそうなツジ」

ツジ 「かわいいそくない……！！」

トマ 「哀れなツジ」

ツジ 「哀れなくない……！！」

トマ 「メーメー喚くな。余計にヒツジに見える」

ツジ 「(かっとなって) トマ……！！」

トマ、おもむろにツジの頬を掴む。

トマ 「トマはツジのことが嫌いだ」

ツジ 「(ふがふが)」

トマ 「しかし、お嬢様のお世話をしなければならぬ以上、基本的には協力的でありたいと考えている」

ツジ 「(ふがふが)」

トマ 「しかし、あくまで基本的には協力的であるというだけであって、全面的にトマがツジの言いなりになるわけではないことを」

ツジ 「(ばたばた)」

トマ 「(非常に鋭く) いつになったら理解できる?」

お嬢様 「ねえ」

トマ 「(ツジの口を押えたまま) なんでしょうお嬢様」

お嬢様 「虫さんたちはどうなってしまったの?」

トマ 「さて、犬が啜えていました」

お嬢様 「食べられちゃったの!?!」

トマ 「さて。どうでしょう」

トマ、ツジを離す。

トマ 「(ひどく鋭く責めるように) ツジ、君がしっかりしていないから、お嬢様が虫けらなんぞに気を取られている」

ツジ 「(頬の具合を確かめながら嫌味っぽく) また新しいモノを用意しなければなりませんねえ」

トマ 「(そっけなく) どうぞ、ご自由に。しかし、絵を描くのはトマの前では絶対に行うな」

ツジ 「じゃあ、いつやればいいんですか? 必要な習慣なんですよ!?!」

トマ 「トマの見ていないところでこそこそと」

ツジ 「習慣です!」

トマ 「ツジのだろう? トマのではない」

ツジ 「ツジの習慣は屋敷の習慣です!」

トマ 「そう思っているのはツジだけだ」

ツジ 「(怒り心頭) むああああああ...」

と、突然、おせん登場。BC おせんに懐く。
手には草の生えた植木鉢を持って、去る。BC も共に。トマ&ツジ、おせんに視線を向けている。

お嬢様、屋敷の外に目線。じっと、見つめている。
奇妙な沈黙。

トマとツジ、急に静かに。

ツジ 「(妙にゆったりと) おじようさま」

お嬢様、屋敷の外から目を離さない。

ツジ 「おじようさま」

お嬢様、屋敷の外に夢中。
なにやら、人形のような雰囲気のとまとツジ。

ツジ 「ねえ、と言わなければなりません」

とまと 「ねえ、と声を掛けなければなりません」

ツジ 「(淡々と) お嬢様はツジの絵のモデルにならないければなりません」

とまと 「(淡々と) お嬢様に水を与えないといけません」

ツジ 「とまとのじょうろを壊しました」

とまと 「ツジのスケッチブックを破りました」

ツジ 「習慣だからです」

とまと 「それは習慣だからです」

ツジ 「お嬢様はツジの言葉に答えなければなりません」

とまと 「お嬢様はとまとの話を聞いていなければなりません」

ツジ 「旦那様は帰りません」

とまと 「屋敷の外には何も咲いていません」

ツジ 「旦那様は行ったきりです」

とまと 「屋敷の外の真っ暗闇に行ったきり帰ってきません」

二人 「花は」

ツジ 「咲いています」

とまと 「ここに咲いています」

ツジ 「虫けらは」

とまと 「犬が啜えていました」

二人 「(強く) お嬢様……!!」

お嬢様、はっと振り返る。

おせん登場。

おせん 「(舞台外側に向かって) 虫けらがいます」

とまと&ツジ、厳しい視線を外に向ける。

お嬢様 「(興味津々といった様子で) どい?」

おせん 「さあ、BCは働き者ですから」

お嬢様 「食べちゃったの?」

おせん 「虫けらなど、食べませんよ」

ツジ 「虫けらは食べ物ではありませんよ」

とまと、おせんを見やる。

とまと 「番犬は番犬の習慣を守るべきだ」

おせん 「番犬の習慣は誰も代わらないのですね?」

とまと 「当り前だ。番犬は番犬だ」

おせん 「番犬はお人形ではありませんよ?」

とまと 「(おせんを睨み付け) 犬は飼い主に似るといふ」

おせん 「(淑やかに) 何をおっしゃいますか」
トマ 「虫けらが入った」
おせん 「(おほほ、と笑い) あら、それは大変」
トマ 「(淡々と) 犬は飼い主に似るといふ」
おせん 「おせんは人形ではありませんよ？」
トマ 「犬は飼い主に似るといふ」
おせん 「おせんは人形ではありませんよ？」
トマ 「虫けらはどうした？」
おせん 「全部で三匹」
トマ 「虫けらはどうした？」
おせん 「全部で三匹。そのうちの一匹は大きいのです」
トマ 「大きいのか？」
おせん 「そう、大きい、虫けら」
トマ 「蟻が悪いのでは？」
おせん 「あら、では殴ればよいのでは？」
トマ 「ああ、そうしよう」

トマ、おせんを殴りつける。
床に倒れるおせん。

おせん 「(憎らしげに)・・・下劣な習慣」
トマ 「・・・上品かぶれ」
おせん 「暴力に訴える」
トマ 「笑えばいいと思ってる」
ツジ 「(二人に) 止めてください！」
ツジ 「ツジ、これも一つの習慣だ」
おせん 「そんな習慣知りません！ 勝手に増やさないで！」
おせん 「(まったく無視して) お嬢様、お花が咲きますよ」

トマ、ツジ、ぱつとおせんを見る。

お嬢様 「え！」
おせん 「お花が咲きますよ」
お嬢様 「本当に？」
おせん 「ええ。綺麗なお花が」
トマ 「(淡々と) 花は咲いています」
ツジ 「(同じく) ええ、咲いています」
お嬢様 「どこ？」

お嬢様、屋敷の外を見る。
トマ&ツジ、お嬢様を見ながら。

トマ 「(静かに) お花」
ツジ 「私たちのお花は咲いています」
トマ 「とても愛らしく咲いています」

ツジ 「花は自分の花に気が付かなくてもいい」
トマ 「私たちのお花は屋敷の中に愛らしく咲いています」
お嬢様 「ねえ、外に出てもいいかしら！！！」
トマ&ツジ 「(きつく) なりません！！！」

驚くお嬢様。

優しくお嬢様に寄り添うトマ&ツジ。

トマ 「(優しく) お外には出て行けませんよ」
ツジ 「(優しく) 悪い虫がたくさんいますから」
トマ&ツジ 「お嬢さまは愛らしい」
トマ 「こんなにも愛らしいお嬢様がお屋敷から出たら」
ツジ 「どんな悪い虫が集まってくるかわかりません」
お嬢様 「でも、BCがいるわ」
トマ 「そうですね、BCは働き者です」
ツジ 「でも、お屋敷で過ごしましょう」
トマ 「旦那様がお戻りになるまで」
ツジ 「お屋敷のお外には出ないこと」
トマ 「それがお嬢様の習慣でございます」
ツジ 「ねえ、お嬢様」
お嬢様 「お花が見たい」
トマ 「(につこりとほほ笑んで) いつか、ご覧になることができます」
ツジ 「ええ。いつかご覧に出来ます」
お嬢様 「(やや弱く) 本当に？」
ツジ 「ええ。旦那様がお土産をお持ちになるでしょう」
トマ 「お外に出られては、入れ違ってしまうかもしれません」
ツジ 「ですから、ずっと、待ちましょう」
トマ&ツジ 「お屋敷の中で、待ちましょう」

柱時計の音。

お嬢様のみ動きを止める。

トマ、ツジ、おせんを見る。

トマとツジ、人形のような動きに。

おせん、庭を見ながら。

おせん 「(にこやかに、静かに) 旦那様の元に行きます」
トマ&ツジ 「・・・何？」
おせん 「お屋敷を出て、旦那様の元に参ります」
トマ&ツジ 「何？」
おせん 「お花が咲きます」
トマ 「花は咲いている」
ツジ 「お嬢様がお花です」
おせん 「・・・習慣は大事ですね？」
トマ 「もちろんだ」
ツジ 「習慣を守りなさい」

おせん 「(どちらも指さして) トマはツジはおせん。」

トマ 「どうだっていい」

おせん 「どうでもいい」

ツジ 「どうだっていい」

おせん 「(うつとりと) 旦那様をお慕い続けました」

トマ 「習慣に従え」

ツジ 「習慣は守るのだから」

おせん 「ええ、従いますよ、習慣に」

トマ 「従っていない」

ツジ 「いつもと違う」

トマ 「明日の習慣はおせんだ」

ツジ 「おせんの習慣をトマが戒める」

トマ 「それは習慣だ」

ツジ 「習慣を守りなさい」

おせん 「(妙にゆっくり、はつきりと) わ・た・し」

トマ、ツジ、警戒の様相。

おせん、不敵に笑う。

おせん 「の、花が咲きます」

トマ&ツジ、動きを止める。

虫けらたち登場。

かさかさと這いまわり、おせんを囲む。

動きを止める虫けら&おせん。

ややあって、コケムシ登場。手には植木鉢。花が咲いている。
植木鉢を椅子の上に置き、

コケムシ 「差し上げます」

柱時計の音。

おせん、お嬢様を残し、虫けらたち&従者たち、去る。

3 くawaiiらしいおはな

おせん、椅子の上の植木鉢を膝に抱える。
花を嬉しそうに見つめるおせん。

お嬢様、入り口に向かってにこやかにしている。

お嬢様 「いってらっしゃいませ!!」

しばしして、お嬢様、椅子の上のおせんの腰に腰掛ける。

お嬢様 「(退屈だとも言おうように大きくあくび) あゝあ・・・」

奇妙な沈黙。

お嬢様 「(そのままの状態で) ねえ、おせん」

おせん 「お花が咲きました」

お嬢様 「お父様はいつ戻ってくるのかしら？」

おせん 「ほら、こんなに可愛らしい」

お嬢様 「お土産は何かしら？」

おせん 「可愛いと言ってあげたから」

お嬢様 「私の好きなものだったらいいなあ」

おせん 「こんなにも可愛らしく花を咲かせた」

お嬢様 「本当!？」

おせん 「ええ。本当に可愛らしい」

お嬢様 「だったらいいなあ」

おせん 「ほら、ご覧になって」

お嬢様 「そうねえ・・・」

お嬢様、椅子から立ち上がり、何かを考える。
おせん、じっとお花を見つめている。

お嬢様 「お人形かな・・・」

おせん 「それはお嬢さまのこと」

お嬢様 「いいえ、違うわ」

おせん 「可愛いと思えない」

お嬢様 「ええ、可愛くないお人形なの」

おせん 「その格好も声も何もかも」

お嬢様 「愛らしいのよ」

おせん 「誰も可愛いなどと言わない」

お嬢様 「誰も可愛いって言わないから愛らしいお人形。本当は可愛いだよ」

おせん 「可愛そうなお人形」

お嬢様 「可愛そうじゃないわ。愛そうって言うのよ」

おせん 「愛そう、などと言ってくれる者もない」

お嬢様 「そう、だから、私が言っただけなの。あなたは愛らしいお人形なのよって」

おせん 「なんて、可愛そうなお嬢さま」

お嬢様 「(嬉しそうに) でしょ？」

お嬢様、嬉しそうに笑う。
おせん、立ち上がる。

おせん 「お嬢様の元に、旦那様は戻らない」

お嬢様 「え？」

おせん 「わたくしの旦那様はお屋敷の外からお戻りにならない」

お嬢様 「本当に？」

おせん 「花が咲いたのはお嬢様ではなく、このおせん」

お嬢様 「でも、お父様は照れ屋さんだから、なかなか私に可愛いなんて言ってくれないわ」

おせん 「あなたはお人形」

お嬢様 「そうしたら、私は可愛いお嬢さんになれる？」

おせん 「可愛い可愛いお人形のお嬢様」

お嬢様 「愛らしい私は好き？」

おせん 「ええ、もちろん、大嫌いですよ。お嬢様」

お嬢様 「(照れて) えへ・・・」

と、そこにトマ&ツジ登場。
お嬢様、動きを止める。

トマ 「(おせんに) なぜだ？」

おせん 「(辟易した様子で) わかっているでしょう」

ツジ 「いけません」

おせん 「行けます。そんなことはわかっているでしょう？」

トマ 「ダメだ」

ツジ 「使用人の数が減ります」

トマ 「習慣が減る」

ツジ 「それはダメです」

おせん 「休む暇がなくなりますものね」

トマ 「どこに行く？」

おせん 「お二人だけだとそれは大変でしょう」

ツジ 「虫けらですか？」

おせん 「生傷が絶えない」

トマ 「虫けらになるのか？」

おせん 「ええ、あなた方の言葉を借りるなら、そうです」

ツジ 「ダメです」

おせん 「なぜ？ BCがいるでしょう？ (何かひらめいて楽しげに) そうだ！ あの子も虫けらに——」

トマ&ツジ、おせんに詰め寄る。

トマ&ツジ 「許さない」

おせん 「(突然、うつとりと) 旦那様に恋い焦がれておりますのよ」

トマ 「何？」
おせん 「とても素敵な方」
ツジ 「恋？」
おせん 「陳腐でしょ？」
トマ 「バカバカしい」
おせん 「（小馬鹿にして）いいえ、とかとかしい」
ツジ 「（植木鉢を見て）恋で花が咲いたのですか？」
おせん 「（嬉しそうに）そうですとも！ 私の恋心が、花を咲かせました！ そうしたら、なんと素敵なことか！（そつと秘密を教えるように）聞こえるんですよ」
ツジ 「何が？」
おせん 「聞こえるんですよ」
トマ 「何が聞こえる？」
おせん 「決まっているじゃないですか、虫けらたちの言葉、それは旦那様のお言葉に等しい」

と、突然、ワケ&タアケ登場。駆け込んでくるように登場し、舞台上でスローモーションになる。

以下、登場しながらブツブツとつぶやいている。笑顔である。

タアケ 「適当な名前で呼んでおくれ」
ワケ 「送ってやろうよいつまでも」
タアケ 「いつまでだ？」
ワケ 「そうだなあ、明後日か、それとも土星の輪のあたりまでにしておこうか」
タアケ 「そいつは太っ腹だな！」
ワケ 「いやいや、細かいかもしれない」
タアケ 「存外、やせぽちなんだな」
ワケ 「去年買ったベルトがゆるゆるなんだ」
タアケ 「ゆるいのは許しがたいな」
ワケ 「固いのは柔軟剤を入れ忘れたからだ」
タアケ 「体にはしっかりと塗り付けたのに」
ワケ 「つけただけじゃダメだ、貼り付けないと」
タアケ 「ナイトは騎士か、それとも夜か」
ワケ 「さあて、どっちのことだったかねえ」
タアケ 「忘れてしまったよ」

トマ&ツジ、その様子をじっと見つめている。

虫たちの声、重なり合い、少しずつ熱を帯び、大きくなっていく。

お嬢様、無邪気に虫けらの傍に寄ろうとするが、おせん、それを阻止する。

お嬢様 「おせん？」

おせん、植木鉢を手に、お嬢様を見つめる。

おせん 「（お嬢様を見つめながら）今日は、おせんの順番なのです。明日はトマの番。明後日はツジ。今日はおせんがトマをいたぶる日でございます。おせんは・・・」

今日のお嬢様の御召し物を用意しておりません。それはおせんの習慣でした。今までは。ずっと、おせんの習慣でした。ご用意した御召し物は必ずトマかツジに破られました。いくつも、いくつも。(ため息をついて、しかし、どこか幸福そうに) お嬢様、おせんはお暇を頂きます。このお屋敷から去ります。お嬢様」

おせん、お嬢様の前に植木鉢を差し出し、

おせん

「おせんの花が、咲きました。これは、おせんの花です。この意味がお分かりですか？ (お嬢様の顔を見つめて) いいえ。お分りになるはずがない。お屋敷のお人形様。わ、た、し、は、人形ではない。恋に焦がれる一人の女。旦那様をお待ちすることはもうできない。だから、私はお屋敷を出て行くことにしました。そうしたら、花が咲きました。虫けらが集まってきました。私を旦那様のところへと連れて行ってくれるのですよ？ このお花は私の花。だれのものでもない、私だけの花。もう、人形じゃない。だから、さようなら、お嬢様」

お嬢様

おせん

「ここから、いなくなります」

トマ

「ダメだ」

ツジ

「許しません」

お嬢様

「(トマに) ねえ、おせんはどこかに行ってしまうの？」

トマ

「(おせんを見たまま) どこにも行きませんよ」

ツジ

「(同様に) ええ、どこにもやりません」

お嬢様

「(おせんに) ねえ、おせん、お土産はお花がいいな」

おせん

「ええ、お花をお土産にして差し上げましょう」

お嬢様

「ホント!？」

おせん

「ええ、本当です」

お嬢様

「ねえ、お花って、どんな形をしているの？」

おせん

「(小馬鹿にして) さあ、おせんにもわかりません」

お嬢様

「甘いのかな？ 苦いのかな？ 黄色い？ 赤い？ 大きい？ 小さい？ 可愛い？ あ、違った。愛らしい？ お父様は持つてきてくれるかしら？」

おせん

「いいえ、旦那様はお嬢様の元には戻りませんよ」

お嬢様

「なぜ？」

おせん

「(どこか嫌みたらしく、いやらしく) ええ、だって、ほら、お嬢様はその使用人たちのお人形。お人形のお花は偽物のお花。お人形のお花は(トマとツジを見て) お人形のお花。だから、お人形にはお父様もお花も要らないのです」

お嬢様

「(悲しい顔で) お人形？ トマとツジはお人形なの？ お父様は要らないの？

おせん

「なんで？ ねえ、おせん、どうして？」

おせん

「(不敵に笑う) もう、うんざりです。さようなら、皆さん」

虫けらたち、おせんを迎える。誘うように。

と、トマ&ツジ、同時に床を強く踏み鳴らす。

それを合図に BC 登場。

虫けらたちを蹴散らす。

おせん、少し離れて、

おせん 「お座り！！！！」

BC、従順に従う。

おせん、BCを撫でい、

おせん 「お前はなんでそんなに馬鹿なの？」

BC 「(理知的に偉そうに) 心外だ。BCはそういう立場なのだから」

おせん 「不躰な犬」

BC 「仕方あるまい。BCの習慣はそういうものだ」

おせん 「ワンワンと吠え立てたところで虫けらはやってくる」

BC 「知っている。だが、それがなんだというんだ？」

おせん 「知っているのに知らないフリをしているのね」

BC 「それが習慣というものだ。習慣は見えて見ぬふりをするものだ」

おせん 「そう、よく躰けられているのね」

BC 「不躰だと言われるがな」

おせん 「出て行くことにしたの」

BC 「そうか、それは寂しくなるな」

おせん 「あなたも一緒にいかが？」

BC 「鞍替えか？」

おせん 「私を守ってほしいのよ」

BC 「うゝむ」

BC、二足歩行で悩む。

その場にいる皆に視線を走らせ、

BC 「行いっ」

トト 「BC……」

シン 「何を言っているんです！？」

BC 「だが、おせんは主人だ。犬の本懐とは主人の言うことに従うことにあるとBCは思っ」

トト 「BCの主人はお嬢様だろう！？」

シン 「おせんではないー！」

BC 「ん。そうなのか？ 確かにお嬢様は好きだ。しかし、習慣的にBCはおせんの犬ということになっていると思っただがな」

トト 「許さなごぞー！」

シン 「そんなものは言葉のあやでしょう！？」

BC 「あやだろうがなんだろうが、おせんが主人であるという言い分が習慣化してしまっていたら、もはやその習慣に従うよりほかはあるまい。屋敷の中では習慣に従うのが正しいのだろうか？」

トト 「だったら、ここでおせんに従うのは習慣から外れる」

シン 「それはどう考えなのです？」

BC 「それはもつともだが、もう、腰も痛い」

シン 「誰が虫けらを追い払うんです！？」

BC 「自分たちでやればよからう？ 考えてみれば、BCの習慣は誰もやってくれないじゃないか」

トマ 「それはBCが大だからだ！」
BC 「ならBCは虫けらになろう」
ツジ 「なりません。なれません！！ 犬が虫けらになどなれるはずがない！」
おせん 「あら、なぜ？」
トマ 「虫けらの方が下等だからだ！」
ツジ 「この屋敷では習慣が何よりも優先される！」
おせん 「まさか、足の数で判断しているんじゃないでしょうね？」
トマ&ツジ 「屋敷から出ることは許さない！！！」
BC 「やかし〜 BCは決めたのだ！ 決めたことは変えられない！ さ、参ろう。
(虫けらたちに) おぬしら、案内せい！」

ワケ、タアケ、お互いの顔を見やりながら、BCを案内する。
トマ&ツジ、何もしないで見ている。

おせん 「(嫌味たらしく) なんで追わないんです？ ああ、習慣にはないですものね、去るものの後を走って追う、なんて。あはは・・・」
お嬢様 「ねえ、BCはどこに行ってしまったの？」
おせん 「とても、素敵な場所ですよ」
お嬢様 「素敵な場所って何？」
おせん 「これから私も参ります」
お嬢様 「おせんはどこかに行ってしまうの？」
おせん 「ええ、行ってしまうます」
お嬢様 「行けるの？そこはどこの？」
おせん 「さあて、どこののでしょうか？ お屋敷から出てみないとわかりません」
お嬢様 「(窓に寄って) お庭の外？」
おせん 「ええ、あそこに柵があるでしょう？ その、向こうです」
お嬢様 「柵の向こうは、真っ暗よ？」
おせん 「お先真っ暗の先があるのですよ」
お嬢様 「何をしたらいけるの？」
おせん 「行きたいと思ったら」
お嬢様 「じゃあ、私も行き——」
トマ&ツジ 「なりません！！！！！」

お嬢様、ものすごく驚き、泣き出してしまふ。

おせん 「(意地悪く) ふふ。おかわいそうなお嬢様。さて、皆様、ごきげんよう」

おせん、去る。

泣きじゃくっているお嬢様。

トマ&ツジ、憎々しげにおせんを睨み付けている。
ややあつて、

トマ 「！！！」

トマ、おせんを追って走り去る。

「(泣きながら) 柵の向こうには何があるの？」

ツ
ジ

「
・
・
・
」

「ねえ、お屋敷の向こうは何があるの？」

ツ
ジ

「
・
・
・
」

お嬢様 「ねえ、育てているお花を見せて」

ツジ「・・・」

「ねえ、お花が見たい！！！」

ツジ「・・・」

「私のお花はどこにあるの……!」

ツ
ジ

「
・
・
・
」

「ねえ！ お花はどんな形をしているの！！！！！！！！」

ツ
ジ

「
●
●
●
」

「BCとおせんはどいに行つたの!!!」

ツジ

「ねえ！！！！！！ツジ！！！！！！教えてよ！！！！！！」

ツジ、お嬢様を見つめる。

何かを言おうとするが、言えず、黙る。

お嬢様の泣き声のみ聞こえる。

ツジ、ふと、

「……いいです」

「え？」

「狂い、です」

「くるい・・・？」

ツジ 「みんな、狂っております」

「なに？」

「あそこには行つてはなりません」

「狂うのは、いけないの？」

「ええ、いけないことです」

と、柱時計の音。

同時に、トマ、速足で戻ってくる。手にはおせんの植木鉢。

舞台中腹で植木鉢を振り上げ、屋敷の奥に去る。

おせん、駆け込んでくる。必死の形相。

おせん、トマを追つて去る。

おせん（声のみ）「だめええええええええええ！！！！！」

植木鉢が碎ける音。

ツジ、様子を伺いに屋敷奥へ去る。

一人になるお嬢様。

静かになる。突然、柱時計の音。

舞台上に響く柱時計の音。

と、時計の音が途切れる。

コケムシ登場。

手には小さな植木鉢。何かが生えている。

コケムシ、お嬢様の近くに、植木鉢を置く。

コケムシの声、何を言っているのかわからない。

コケムシ 「(もちやもちやと) お持ちしました」

お嬢様 「・・・だあれ？」

コケムシ 「(もちやもちやと) だあれでしょう？」

お嬢様 「虫さんなの？」

コケムシ 「差し上げます」

お嬢様 「・・・なあに？ これは？」

コケムシ 「(囁くようにしかし、はつきりと) 花が、咲きます」

お嬢様 「え！！！？？」

コケムシ 「(指を唇にあてて) しーーーーー」

お嬢様とコケムシ静かになる。

コケムシ 「(小声で) お嬢様は可愛い」

お嬢様 「私は可愛いのか？」

コケムシ 「ええ、とても、とても、可愛い、お花」

お嬢様 「私はお花なの？」

コケムシ 「そうですよ。お屋敷のお花。使用人たちの可愛いお人形」

お嬢様 「(憮然として) お人形じゃないわ」

コケムシ 「いいえ、お嬢様も使用人も、お人形」

お嬢様 「(植木鉢を指して) これは、何？」

コケムシ 「それはお花」

お嬢様 「おせんが持っていたのと違う」

コケムシ 「それはつぼみ」

お嬢様 「つぼみは何？」

コケムシ 「花が咲きます」

お嬢様 「おせんが持っていたのと一緒ね！？」

コケムシ 「あれは、偽物」

お嬢様 「じゃあ、これも偽物？」

コケムシ 「偽物だと思えば」

お嬢様 「じゃあ、本物だと思うわ！」

コケムシ、こふこふと笑う。

コケムシ 「お嬢様は本当に可愛い」

お嬢様 「違うわ、可愛いっていうのよ」

コケムシ 「愛らしいと言われたから？」

お嬢様 「そう、だから私は可愛いっていうの」

コケムシ 「(嬉しそうに) お花が咲いたら、虫けらたちが案内してくれます。柵の向こう側

で、お父様がお待ちです。でも、もう、お嬢様のことをお忘れだと思います」

お嬢様 「忘れちゃったの？ なんで？」

コケムシ 「虫けらたちの町中で、大いに楽しんでおいでですから。お嬢様のことなんて、これっぽっちも思い出す暇も御座いません」

お嬢様 「そんなの嫌」

コケムシ 「だったら、お屋敷の外の柵の向こうの真っ暗に、おいでなさい。花を咲かせて」

お嬢様 「でも、私は・・・」

コケムシ 「お父様にお会いしたいのなら、お花を咲かせることです」

お嬢様 「あなたはだあれ？」

コケムシ 「コケムシ」

お嬢様 「コケムシは、虫さんの？」

コケムシ 「ええ、虫が名前に入っておりますでしょう？ 苔の生えた虫。コケムシは苔むした柵の向こうでお嬢様のお出かけをお待ちしておりますよ」

コケムシ、去ろうとする。

ふと、立ち止まり、

コケムシ 「(懇慫に) では、お人形のお嬢様、お花が咲くことを祈っております」

お嬢様、あたりをきよろきよと見回し、椅子の下に植木鉢を隠す。
そして、椅子の上に腰掛ける。

朝。

きらきらと光る朝日、小鳥たちの声。

お嬢様 「いってらっしゃいませ!!」

お嬢様、元気に手を振り、何者かの姿を見送る。

しばらくして、手を振るのを止める。しかし、視線は屋敷の外に。

おせん、トマ登場。

頭からすっぽりと布きれを巻いているおせん。憔悴した顔。布には花柄。

トマ、おせんを介護するように手を引いている。

周囲にせわしなく視線をさまよわせているおせん。何かを探している様子。

お嬢様、だらりと椅子に腰かける。

お嬢様 「(退屈だとしても言うように大きくあくび) あゝあ・・・」

おせん、崩れるようにしてお嬢様の傍に。トマ、無理やりおせんを立たせ、布を引つpegし、お嬢様の体にかける。

この後のやり取りはおせんの言葉に力がなく、ほとんど何を言っているのかわからない程度。結果、比較的、早いテンポでお嬢様の一人語りの様に聞こえるのが望ましい。

お嬢様 「ねえ、おせん」

おせん 「(淡々と) はい」

お嬢様 「お父様はいつ戻ってくるのかしら？」

おせん 「お忙しい方ですから」

お嬢様 「お土産は何かしら？」

おせん 「なんでしょうね？」

お嬢様 「私の好きなものだったらいいなあ」

おせん 「きっとお嬢様のお好きなものでしょう」

お嬢様 「本当!？」

おせん 「ええ。きつと」

お嬢様 「だったらいいなあ」

おせん 「なんだったら満足なさいますか？」

お嬢様 「そうねえ・・・」

お嬢様、椅子から立ち上がり、何かを考える。

おせん、再び床に崩れそうになる。再び無理やり立たせるトマ。

呆然自失といった様子のおせん。

トマ、腹話術よろしく、おせんの代わりに喋る。

お嬢様 「お人形かな・・・」

トマ 「可愛いお人形？」

お嬢様 「いいえ、違うわ」

トマ 「お人形なのには？」

お嬢様 「ええ、可愛くないお人形なの」

トマ 「(少し笑顔で) 可愛くないならどんなお人形でしよう？」

お嬢様 「愛らしいのよ」

トマ 「どう違うんです？」

お嬢様 「誰も可愛いって言わないから愛らしいお人形。本当は可愛いだよ」

トマ 「誰も言ってくれないなんて、かわいそうですね」

お嬢様 「可愛そうじゃないわ。愛そうって言うのよ」

トマ 「誰も言わないから？」

お嬢様 「そう、だから、私が言ってあげるの。あなたは愛らしいお人形なのよって」

トマ 「そうしたらお人形は可愛いお人形になりますね」

お嬢様 「(嬉しそうに) でしょ？」

トマ 「旦那様はきつとおっしゃってくださいますよ」

お嬢様 「え？」

トマ 「お嬢様に、可愛いとおっしゃってくださいます」

お嬢様 「本当に？」

トマ 「ええ、もちろんですとも」

お嬢様 「でも、お父様は照れ屋さんだから、なかなか私に可愛いなんて言ってくれないわ」

トマ 「でも、心の奥ではちゃんと思っているはずですよ」

お嬢様 「そうしたら私は可愛いお嬢さんになれる？」

トマ 「ええ、もちろん。でも、今のままでも十分愛らしいですよ？」

お嬢様 「愛らしい私は好き？」

トマ 「ええ、もちろん。大好きですよ。お嬢様」

お嬢様 「(照れて) えへ・・・」

トマ 「お嬢さまは本当に愛らしい。お人形なんかよりもよっぽど」

お嬢様 「でも、お人形は本当に欲しいのよ」

トマ 「お人形じゃなかったら、どうします」

お嬢様 「お人形じゃなかったら・・・？」

再び何かを考えるお嬢様。
なにやら声が聞こえる。

突然、虫けらたち(ワケ&タアケ)が一斉に駆け込んできて、舞台端で止まる。なにやら楽しそうな様子である。ぶつぶつと何かつぶやいている虫けらたち。

お嬢様、虫たちを見て、

お嬢様 「・・・花」

おせん 「(顔を上げる)」

お嬢様 「お花が欲しいわ」

おせん 「・・・お花」

お嬢様 「(虫けらたちを指して) だって、虫さんたちが見ているわ」

おせん 「虫・・・」

おせん、虫けらたちを見やる。
と、虫けらと目が合う。

おせん、ぱっと、虫けらに飛びかかる。

おせん

「なぜ・・・？ 約束が違う・・・？ お前たちは私を旦那様の元に案内してくれるはずだったでしょう・・・？ なんで・・・。なんで・・・。花が咲いたのに。私の花が咲いたのに・・・、なんで・・・？」

お嬢様

「虫さんが入ってきたら、止まる花がいるわ」

トマ、おせんをむりやり立たせる。

おせん、打ちひしがれている。

トマ

「(再び腹話術) 虫けらはすぐに出て行ってしまうよ」

お嬢様

「(こうしたら?)」

お嬢様、虫けらたちの手を握り、舞台上に連れ出す。踊りだす三人。

おせん、三人に飛びかかろうとするが、トマがそれを許さない。

嬉しそうに見合うお嬢様と虫けらたち。

憎々しげなおせん。

お嬢様

「ね? こうしたら、離れないもの。出て行きもしないわ」

トマ

「(腹話術) 止まる場所が必要ですね」

お嬢様

「一晩泊まる場所が必要でしょう?」

トマ

「お花」

お嬢様

「そう。お花」

トマ

「お土産に」

お嬢様

「(何かを期待するように虫けらたちを見つめて) そう、お土産に届くわ」

トマ

「届きませんよ」

トマ、足を踏み鳴らす。

ツジ、突然四つん這いになって登場。虫けらたちに警戒心をむき出しにして、吠え立てる。

虫けらたち、わらわらと舞台端に逃げる。それを追うツジ。

が、何かの存在に気が付き舞台上に戻ってくる。「うゝ」とうなっているツジ。トマ、不審げな顔で屋敷の外を見つめる。

屋敷外より BC 登場。二足歩行である。その後ろに虫けらたち。

BC、鷹揚な様子で舞台上に。

にらみ合う、両者。

突然、柱時計の音。

制止する一同。

その代りに虫けらたちのざわめきが大きくなってくる。

お嬢様の近くに寄ってくる虫けら。まるで、何かを耳打ちしているよう。

BC

「(突然大きな声で) おはようございます、お嬢様」

お嬢様

「(づっくろし(っ) BC、お口がきけるの?」

BC

「きけますとも。大いに、この通り」

お嬢様

「(ぐたべたと触りながら) でも、初めて聞くわ」

BC

「喋っつはいけないという習慣で(っ)いましたから」

お嬢様 「まあ、それはとっても息苦しそう」
BC 「息苦しくはありません。なにせ、犬でございましたから」

と、BC、犬の真似をする。はっはっは・・・。

BC 「ほら、ごらんのとおり。犬はすべての生物の中で、もつとも息苦しさから遠い生き物といえましょう。つまり、BCは別段息苦しさは感じておりませんでした」
お嬢様 「そうなの。私だったら、ずっと黙っていることなんてきつと息が苦しくて死んでしまいそうになると思うわ」

BC 「うむ。それは息苦しいのではなく、生きぐるしいと申すのでしょうか。このBC、昨晚屋敷の周りをぐるりと、回しの猿ごとく回ってまいりましたが、世相世間はそれは生きぐるしいと叫ぶ者で溢れておりました」

お嬢様 「(興味津々に) お屋敷の外？」

BC 「ええ」

お嬢様 「柵の向こうに？」

BC 「ええ、参りましたよ」

お嬢様 「(ひそひそと、しかし、興味津々という様子で) じゃあ、狂っていたのね？」

BC 「狂い？」

お嬢様 「ツジが言っていたわ。お屋敷の外は狂いがあるって」

BC 「確かに。狂いと言えば狂いでしょうな」

お嬢様 「(感激して) やっぱり、狂っているのね!？」

BC 「右も左も狂いで満ちておりました」

お嬢様 「虫さんたちもいた？」

BC 「たくさんおりました」

お嬢様 「どんな？ どんな虫？」

BC 「いろいろおりました。華やかなコガネムシ。権力者のカミキリ。強欲なカブトムシ」

お嬢様 「(感動して) 聞いたことがない。他には？」

BC 「窓際に座る徒労の蟪蛄。家を失くした働き蜂。ホテル街に消える浮気の虫」

お嬢様 「町があるの？」

BC 「町がありました」

お嬢様 「虫さんたちの町ね!」

BC 「狂った町でした」

お嬢様 「狂った虫さんたちの町なのね!」

BC 「(窓の外を眺めて) 虫けらがたくさん町を作っておりました」

お嬢様 「お父様は？」

BC 「旦那様？」

お嬢様 「お父様が待っていると言っていたわ」

BC 「旦那様はどこにもいらっしやいません」

お嬢様 「狂ってしまったの？」

BC 「やもしれません」

お嬢様 「じゃあ、探しに行くわ」

BC 「お花が咲いていない。お花が咲かないと、お嬢様は外には出られない」

お嬢様 「(植木鉢を指して) お花はあるわ」

BC 「それはまだつぼみ」

お嬢様 「どうしたらいいの？ 私、お父様を探さないと虫さんたちの町に行ってみたいの。柵の外に行きたいの。どうしたら花は咲くの？」

BC 「習慣を切るのです」

BC、懐から鋏を取り出し、お嬢様に渡す。
お嬢様、鋏を眺めて、

お嬢様 「切るの？」

BC 「そうしてみたらいい」

お嬢様 「どうやって？」

BC 「鋏はなんだって切れます」

お嬢様 「なんだって？」

BC 「花々の剪定から、紙切れをまっすぐ切ること、そして、日々の習慣を断ち切ることも」

お嬢様 「（いつそりと、悪いことを確かめるように）楽しいの？」

BC 「ええ、きつと」

お嬢様 「シュウカンって、どんな形をしているのかしら？」

BC 「きつと、糸のようなものです」

お嬢様 「細いの？」

BC 「細くて、丈夫です」

お嬢様 「どこにあるのかしら？」

BC 「お人形の上に生えていますよ」

お嬢様 「（はっとして嬉しそうに）お人形は愛らしい？」

BC 「やあ、BCには愛らしくはうつりません」

お嬢様 「可愛そうなお人形なのね」

BC 「いいえ、可愛そうなど、これっぽっちも思っちゃいません」

お嬢様 「（ふん）・・・BCはなんで出たの？」

BC 「（妙にはつきりと）犬は、居ぬと言うでしょう？ ここにいるもないも、決めるのは、犬の自由なのですよ」

BC、お嬢様から離れる。

舞台隅に。虫けらたちも同様に、舞台四隅に広がって座り込む。

ぶつぶつと何事か呟き続けている虫たちとBC。聞き取れない。

お嬢様、静止しているトマの頭上を鋏で切る。

じゃきん。

トマ、人形のようにその場に崩れ落ちる。

虫たち、ざわめく。楽しそうに。

BC 「切れた」

ワケ 「切れたな」

タアケ 「切れたならば」

BC 「切れた切れた」

ワケ 「切れたようだ」

タアケ 「切れるものなら」

BC 「切れてしまった」

ワケ 「待ったなしに」
タアケ 「なしになる」

虫けらたち、笑う。

お嬢様、崩れたトマをじつと見つめる。

お嬢様 「・・・トマ？」

お嬢様、トマの体を揺り動かす。
動かないトマ。

お嬢様 「・・・トマ？」

おせん 「(ぼつりと)・・・切れた」

お嬢様 「切れたの？」

おせん 「ええ、切れました。トマは」

お嬢様 「シュウカン？」

おせん、おびえるように舞台端に這いつくばる。布を体中に巻き付け、逃れるようにする。

お嬢様、訳が分からず、おせんに近づく。
ますますおびえるおせん。

と、そこにツジ四つん這いで登場。トマの異変に気が付き二足歩行で駆け寄る。

ツジ 「トマ!？」

お嬢様 「切ったのよ？」

ツジ 「お嬢様？」

お嬢様 「だって、切らないとお花は咲かないと言われたから」

ツジ、虫けらたちを睨み付ける。

ツジ 「虫けらども!!!!!!」

タアケ 「(とぼけた様子で) だって、仕方がない」

ワケ 「ないない」

タアケ 「ないことはない」

ワケ 「ナイフよりは切れないとは思うよ」

タアケ 「うようよしている虫けらの仲間になりたいと、お宅のお嬢さんが言ってきた」

ワケ 「(BCを指して) きたから、うちの新入りにご教授差し上げたのさ」

BC 「ああ、そうだ。なぜならBCは犬だったからな。犬は自由なのが性分だ。だから、うってつけだと思った」

ツジ 「犬が偉そうに」

BC 「偉そうじゃない。元々こういうたちなんだ。認めるべきはBCの性分だろう?」

ツジ 「放っておいて」

タアケ 「(皆を見て) そういうわけには」

ワケ 「行かないなあ」

タアケ 「ああ、そううまくいくわけがない」

ワケ 「だって、虫はたかるだろう？」

タアケ 「苔むしたところにたかるだろう？」

ワケ 「このお屋敷はどこも苔むしている」

タアケ 「古い習慣が苔むしている」

ワケ 「じゃあ、そこにたかるよな？」

タアケ 「たからないわけにはいかないよな？」

ツジ 「(怒って) 放っておけ！ 放っておきなさいよ！！」

タアケ 「苔むしたお人形が何か言っている」

ワケ 「放っておけ。ただの愛そうなお人形だ」

タアケ 「(手を上げて) 俺が言つてやるよ。(ツジに) おい、お前は可愛そうなお人形だ！！」

ワケ 「これでお前は可愛そうなお人形になったぞ？」

タアケ 「苔むした屋敷の中の古臭い可愛そうなお人形になった」

ワケ 「なったなら、やっぱり切らなけりや」

タアケ 「足を引っ張るのは切らなけりや」

ワケ 「そうそう。それが大事だよね」

タアケ 「そうそう。それが大事」

BC 「・・・でも、我々ではない」

ツジ、お嬢様を見る。

お嬢様、どこか穏やかに微笑んでいる。

お嬢様、ツジに近づく。ツジ、後ずさりをしながら、

ツジ 「お嬢様、およしになつてください」

お嬢様 「だって、お花を咲かせないと」

ツジ 「お花は咲いていますよ」

お嬢様 「違うわ」

ツジ 「いいえ、お花はここに」

お嬢様 「咲いていない」

ツジ 「お嬢様！！！」

ツジ、お嬢様を抱きしめる。

ツジ 「(必死に) お嬢様、お嬢様は花でございます。御屋敷の花でございます。ツジの、トマの花でございます。お嬢さまがお花なのでございます。だから、大切に致しました。お嬢さまをお守りしました。お守りするのに習慣を作りました。毎日毎日習慣を行いました。お嬢様は花だから。ツジとトマの大切なお花だから。だから、お嬢様はきれいなままでいらつしやる。ツジとトマが守ったから。だから、お花は要らないんです。お嬢様のお花は要らないんです。お嬢様はこのお屋敷の中で日々を過ごすだけでいいんです。お嬢様は花だから。虫けらたちにそそのかされてはいけません。あいつらは狂っている。何もかもが狂っている。虫けらたちの言うことを信じてはいけません。お嬢様は——」

お嬢様、鉢をツジの頭上にふるう。

じよきん。

崩れ落ちるツジ。

お嬢様、じつとツジを見つめて、

お嬢様 「(正直に) だって、お花が咲かせたいんだもの」

お嬢様、くるりと振り返り、おせんに向かう。

お嬢様 「ねえ、おせんはあのお花をどこで手に入れたの？」

おせん 「(おびえて)・・・」

お嬢様 「(だんだん近づいていく) ねえ、おせん」

お嬢様、だんだんと距離を縮めて、おせんの真正面でしゃがむ。

お嬢様 「ねえ。おせん、教えて？」

おせん 「あ、あ、あ」

お嬢様 「ねえってば！」

ワケ 「あの花はね」

タアケ 「根っこなんだ」

お嬢様 「根っこ？」

ワケ 「その女は恋をした」

タアケ 「旦那様に恋をした」

ワケ 「でも」

タアケ 「恋は根だから」

ワケ 「根は大切だ」

タアケ 「恋は花だ」

ワケ 「でも、根っこ」

タアケ 「根っこが咲いただけ」

ワケ 「きれいな根っこが咲いただけ」

タアケ 「恋は下にあるから花は咲かないんだ」

ワケ 「わかる？」

タアケ 「ねえ？」

BC 「下心は、恋だろう？」

ワケ 「本当の花は上に付く」

タアケ 「愛、上、と言うだろう？」

BC 「恋では、花は咲かないんだ」

ワケ 「だからお屋敷からは出られなかった」

タアケ 「視野が狭くなるのも恋の特権だよね」

BC 「恋は盲目」

ワケ 「なら愛は？」

タアケ 「至上の愛情」

BC 「じゃあ、花は上に咲くな」

ワケ 「上に咲く花は本物だ！」

タアケ 「花は頭上に咲くものだ！」

おせん、舞台上の花に眼をやる。
お嬢様も見る。

おせん 「花・・・」
お嬢様 「お花・・・？」

BC 「(おせんに) 花があれば、また、恋が出来るぞ」

おせん、ぱつと動く。
それを阻止するお嬢様。

おせん 「どけええええ!!!!!!」
お嬢様 「なんで？ おせん、あれは私のお花なの」
おせん 「花があればここから出られる」
お嬢様 「出て行くのは私よ!」
おせん 「やかましい、人形!!!!」
お嬢様 「人形じゃないわ!」
おせん 「(必死に) お願いどいて、邪魔をしないで、あの町に行かないと」
お嬢様 「町に行くのは私よ。柵を乗り越えて、お父様に会いに行くの!!!!!!」
おせん 「(激怒して) お前が旦那様に会えるものか! 恋した私が、旦那様に会いに行くんだ!!!!!!」

おせん、お嬢様に掴み掛る。
もんどりうって倒れるお嬢様。
ふたり、つかみ合って倒れ、もみ合いに。
その様子を楽しげに見ている虫けら(ワケ、タアケ、BC)、歌い始める。しかし、その歌は歌にはとても聞こえない。
もみ合いを続ける、お嬢様とおせん。

じよきん。

静かになるお嬢様とおせん。
立ち上がるお嬢様。動かないおせん。
お嬢様、吊るされた花を見る。
ゆっくりと椅子に上り、花を手取る。そのまま、椅子に腰かけるお嬢様。
嬉しそうで満足の様子のお嬢様。
ふと、周囲を見回す。虫けらたちが静かに見ている。
笑顔を返すお嬢様。
にこやかに虫けらたち、去る。
一人になるお嬢様。
静かな舞台。ボンボンと、柱時計の音が聞こえる。
お嬢様、ぼんやりと花を見つめる。
静けさ。
と、お嬢様、何かに気が付く。自分の頭の上の何かに手を添える。
そして、鉢を頭の上の何かにあてがい、鉢を振り上げ、
暗転。

暗転中。

町の雑踏。

明転していく。

人形の森。

※できることなら、OPでの形と類似していることが望ましい。

その中に佇むお嬢様。周囲を見回している。

そこに、コケムシ、登場。

手には大きなプレゼントの箱。可愛らしい装丁。

コケムシ、お嬢様にプレゼントを手渡す。

コケムシ、にやりと笑って、人形の森の中に混ざる。

お嬢様、ふしぎな顔をするが、ややにこやかになって、プレゼントを抱えて椅子に座る。

お嬢様、無邪気にプレゼントの蓋を開ける。

蓋が開ききらないところで、

暗転。

終